

百物語

森鷗外

青空文庫

何か事情があつて、川開きが暑中を過ぎた後に延びた年の当日であつたかと思う。余程年も立つているので、記憶が稍おぼろげになつてはいるが又却てそれが為めに、或る廉々がアクサンチュエエせられて、翳んだ、濁つた、しかも強い色に彩られて、古びた想像のしまつてある、僕の脳髓の物置の隅に転がつている。

勿論生れて始ての事であつたが、これから後も先ずそんな事は無さそうだから、生涯に只一度の出来事に出くわしたのだと云つて好かろう。それは僕が百物語の催しに行つた事である。

小説に説明をしてはならないのだそうだが、自惚は誰にもあるもので、この話でも万一ヨオロッパのどの国かの語に翻訳せられて、世界の文学の仲間入をするような事があつた時、余所の読者に分からないだろうかと、作者は途方もない考を出して、行きなり説明を以てこの小説を書きはじめる。百物語とは多勢の人が集まつて、蠟燭を百本立てて置いて、一人が一つずつ化物の話をして、一本ずつ蠟燭を消して行くのだそうだ。そうすると百本目の蠟燭が消された時、真の化物が出ると云うことである。事によつたら例のフアキイルと云う奴がアルラア・アルラアを唱えて、頭を掉つているうちに、靦面に神を

見るように、神経に刺戟しげきを加えて行つて、一時幻視幻聴を起すに至るのではあるまいか。

僕をこの催しに誘い出したのは、写真を道楽しとみにしている薮君と云う人であった。いつも身綺麗みぎれいにされていて、衣類や持物に、その時々おの流行を趁つてゐる。或時僕が脚本の試みをしてゐるのを見てこんな事を言った。「どうもあなたのお書きになるものは少し勝手が違つてゐます。ちよいちよい芝居を御覧になつたら好いでしよう」これは親切に言つてくれたのであるが、こつちが却つてその勝手を破壊しようと思つてゐるのだとは、全く気が附いてゐなかつたらしい。僕の試みは試みで終つてしまつて、何等の成功をも見なかつたが、後継者は段々勝手の違つた物を出し出して、芝居の面目が今ではだいが改まりそうになつて来ている。つまり振ねじれた、時代を超越したような考は持つてもいらず、解せようともしなかつたのが、薮君の特色であつたらしい。さ程深くもなかつた交まじわりが絶えてから、もう久しくなつてゐるが、僕はある人の飽くまで穩健な、目前に提供せられる受用を、程好く享受してゐると云う風の生活を、今でも羨うらやましく思つてゐる。薮君は下町の若旦那わかだんなの中で、最も聡明そうめいな一人であつたと云つて好よかるう。

この薮君が僕の内へ来たのは、川開きの前日の午過ぎひるすであつた。あすの川開きに、両国を跡あとに見て、川上へ上つて、寺島で百物語の催しをしようと言ふのだが、行つて見ぬかと

云う。主人は誰だ。案内もないに、行っても好いのかと、僕は問うた。「なに。例の飾磨屋さんが催すのです。だいぶ大勢の積りだし、不参の人もありそうだから、飛入をしても構わないのですが、それでは徳義上行かれぬなんぞと、あなたの事だから云うかも知れない。しかし二三日前に逢った時、あなたにはわたくしから話をして見て、来られるようなら、お連申すかも知れないと、勝兵衛さんにことわつてあります。わたくしが一しよに行くと好いが、外へ廻つて行かなくてはならないから、一足先きへ御免を蒙ります」との事であつた。

時刻と集合の場所とを聞いて置いた僕は、丁度外に用事もないので、まあ、どんな事をするか行つて見ようと云う位の好奇心を出して、約束の三時半頃に、柳橋の船宿へ行つて見た。天気はまだ少し蒸暑いが、余り強くない南風が吹いていて、涼ぎ好かつた。船宿は今取り払われた河岸で、丁度亀清の向側になつていた。多分増田屋であつたかと思ふ。

こう云う日に目貫の位置にある船宿一軒を借切りにしたものと見えて、しかもその家は近所の雑沓よりも雑沓している。階上階下とも、どの部屋にも客が一ぱい詰め掛けている。僕は人の案内するままに二階へ升つて、一間を見渡したが、どれもこれも知らぬ顔の

男ばかりの中に、鬚ひげの白い依田よだ学海さんが、紺こん 紺がすりの銘めい 撰せんの着流しに、薄羽織を引つ掛けて据わっていた。依田さんの前には、大層身綺麗きれいにしている、少し太った青年が恭しげに据わって、話をしている。僕は依田さんに挨拶をして、少し隔たった所に割り込んだ。簾すだね越しに川風が吹き込んで、人の込み合っている割に暑くはなかった。

僕は暫しばらく依田さんと青年との対話を聞いているうちに、その青年が壮士俳優だと云うことを知った。俳優は依田さんの意を迎えて、「なんでもこれからの俳優は書見をいたさなくてはなりません」などと云っている。そしてそう云っている態度と、読書と云うものが、この上もない不調和に思われるので、僕はおせっかいながら、傍そばで聞いていて微笑せざることを得なかった。同時に僕には書見ことばという詞ことばが、極めて滑稽こっけいな記憶を呼び醒さました。それは昔どこやらで旧俳優のした世話物を見た中に、色若衆のような役をしている役者が、「どれ、書見をいたそうか」と云って、見台を引き寄せた事であった。なんでもそこへなまめいた娘が薄茶か何か持つて出ることになっていた。その若衆のしらじらしい、どうしても本の読めそうにない態度が、書見と云う和製の漢語にひどく好く適合していたが、この滑稽を舞台の外で、今繰り返して見せられたように、僕は思ったのである。

そのうち僕はこう云う事に気が附いた。しらじらしいのは依田さんに対する壮士俳優の

話ばかりではない。この二階に集まった大勢の人は、一体に詞少なで、それがたまたま何か言うと、皆しらじらしい。同一の人が同一の場所へ請待しょうだいした客でありながら、乗合馬車や渡船の中で落ち合った人と同じで、一人一人の間になんの共通点もない。ここかしこで互に何か言うのは、時候の挨拶位に過ぎない。ぜんまいの戻った時計を振ると、セコンドがちよつと動き出して、すぐに又止まるように、こんな会話は長くは持たない。忽ちたちま元の沈黙に返つてしまうのである。

僕は依田さんに何か言おうかと思つたが、どうもやはりしらじらしい事しきや思い附かないので、言い出さずにしまつた。そしてそこの人の顔を眺めながていた。どの客もてんでに勝手な事を考えているらしい。百物語と云うものに呼ばれては来たものの、その百物語は過ぎ去つた世の遺物である。遺物だと云つても、物はもう亡くなつて、只空むなしき名が残つているに過ぎない。客観きゃくかん的には元から幽霊は幽霊であつたのだが、昔それに無い内容を嘘うそき入れて、有りそうにした主観までが、今は消え失せてしまつてゐる。怪談だの百物語だのと云うものの全体が、イブセンの所謂いわゆる幽霊になつてしまつてゐる。それだから人を引き附ける力がない。客がてんでに勝手な事を考えるのを妨げる力がない。

人も我もぼんやりしてゐる処へ、世話人らしい男が来て、舟へ案内した。この船宿の棧さ

橋ばかりに屋根船が五六艘着いている。それへ階上階下から人が出て乗り込む。中には友禪の赤い袖がちら附いて、「一しよに乗りたいわよ、こっちへお出よ」と友を誘うお酌の甲走った声がある。しかし客は大抵男ばかりで、女は余り交っていないらしい。皆乗り込んでしまうまで、僕は主人の飾磨屋がどこにいるか知らずにしまった。又薮君にも逢わなかった。

船宿の二階は、戸は開け放してあつても、一ぱいに押し込んだ客のいきれがしていたが、舟を漕ぎ出すと、すぐ極好い心持に涼しくなった。まだ花火を見る舟は出ないので、川面は存外込み合っていない。僕の乗った舟を漕いでいる四十恰好の船頭は、手垢によごれた根附の牙彫のような顔に、極めて真面目な表情を見せて、器械的に手足を動かしてを操っている。飾磨屋の事だから、定めて祝儀もはずむのだろうに、嬉しそうには見えない。「勝手な馬鹿をするが好い。己は舟さえ漕いでいれば済むのだ」とでも云いたそうである。

僕は薄縁の上に胡坐を搔いて、麦藁帽子を脱いで、ハンケチを出して額の汗を拭きながら、舟の中の人の顔を見渡した。船宿を出て舟に乗るまでに、外の座敷の客が交つたと見えて、さつき見なかつた顔がだいぶある。依田さんは別の舟に乗つたと見えて、とう

とう知つた顔が一人もなくなつた。そしてその知らない、幾つかの顔が、やはり二階で見た時のように、ぼんやりして、てんでに勝手な事を考えているらしい。

舟には酒肴しゅこうが出してあつたが、一々どの舟へも、主人側のものを配ると云うような、細かい計画はしてなかつたのか、世話を焼いて杯さかずきを侷さくめるものもない。こう云う時の習ならいとして、最初は一同遠慮をして酒肴に手を出さずに、只睨にらみ合つていた。そのうち結城紬ゆうきつむぎの単物ひとえものに、縞しまろの羽織を着た、五十恰好の赤ら顔の男が、「どうです、皆さん、切角わ出してあるものですから」と云つて、杯を手に取ると、方方から手が出て、杯を取る。割わ箸しを取る。盛んに飲食が始まつた。しかし話はやはり時候の挨拶位のものである。「どうです。こう天気続きでは、米が出来ますでしょうか」
「さようさ。又米が安過ぎて不景気と云うような事になるでしょう」
「そいつあ慍かないませんぜ。鶴亀つるかめ」
こんな対話である。

僕のいる所からは、すぐ前を漕いで行く舟の艫ともの方が見える。そこにはお酌が二人乗つている。傍そばに頭を五分刈にして、織地のままの繭けんちゆう紬ちゆうの陰紋かげもん附に袴はかまを穿はいて、羽織を着ないでいる、能役者のような男がいて、何やら言つてお酌を拵からかうらしく、きやつきやと云わせている。

舟は西河岸の方に倚つて上つて行くので、廐橋手前までは、お蔵の水門の外を通る度に、さして来る潮に淀む水の面に、藁やら、鉋屑やら、傘の骨やら、お丸のこわれたのやらが浮いていて、その間に何事にも頓着せぬと云う風をして、鷗が波に揺られていた。諏訪町河岸のあたりから、舟が少し中流に出た。吾妻橋の上には、人がだいぶ立ち止まって川を見卸していたが、その中に書生がいて、丁度僕の乗っている舟の通る時、大声に「馬鹿」とどなった。

舟の着いたのは、木母寺辺であつたかと思う。生憎風がぱったり歇んでいて、岸に生えている葦の葉が少しも動かない。向河岸の方を見ると、水蒸気に飽いた、灰色の空気が、橋場の人家の輪廓をぼかしていた。土手下から水際まで、狭い一本道の附いている処へ、かわるがわる舟を寄せて、先ず履物を陸へ揚げた。どの舟もどの舟も、載せられるだけ大勢の人を載せて来たので、お酌の小さい雪踏などは見附かっても、客の多数の穿いて来た、世間並の駒下駄は、鑑定が容易に附かない。真面目な人が跣足で下りて、あれかこれかと捜しているうちに、無頓着な人は好い加減なのを穿いて行く。中には横着で新しそうなものを選んで穿く人もある。僕はしかたがないからなるべく跡まで待つていて、残った下駄を穿いたところが、齒の斜に踏み耗らされた、随分歩きにくい下駄であつた。

後に聞けば、飾磨屋が履物の間違つた話を聞いて、客一同に新しい駒下駄を贈つたが、僕なんぞには不躰ぶしつけだと云う遠慮から、この贈物をしなかつたそうである。

定めて最初に着いた舟に世話人がいて案内をしたのだろう。一艘の舟が附くと、その一艘の人が、下駄を搜したりなんかして、まだ行ってしまわないうちに、もう次の舟の人が上陸する。そして狭い道を土手へ上がつて、土手の内の田圃たんぼを、寺島村の誰やらの別荘をさして行く。その客の群は切れたり続いたりはするが、切れた時でも前の人の後影を後の人が見失うようなことはない。僕も齒の歪ゆがんだ下駄を引き摩すりながら、田の畔くろや生垣いけがきの間の道を歩いて、とうとう目的地に到着した。

ここまで来る道で、幾らも見えたような、小さい屋敷である。高い生垣めぐを繞めぐらして、冠かぶき木門もんが立ててある。それを這入はいると、向うに煤すすけたような古家の玄関が見えているが、そこまで行く間が、左右を外そとがこい 囲こいよりずっと低いかなめ垣しきで為切つた道になつていて、長方形の花崗石みかげいしが飛び飛びに敷いてある。僕に背中を見せて歩いていた、偶然の先導者はもう無事に玄関近くまで行つている頃、門と、玄関との中程で、左側のかなめ垣とぎがとぎれている間から、お酌しやくが二人手を引き合つて、「こわかつたわねえ」と、首を縮めて呷さくき合いながら出て来た。僕は「何かあるのだい」と云つたが、二人は同時に僕の顔を不遠慮

に見て、なんだ、知りもしない奴の癖にとでも云いたそうな、極く愛相のない表情をして、玄関の方へ行つてしまった。僕はふいと馬鹿げた事を考えた。昔の名君は一いっぴん顰一笑を惜んだそうだが、こいつ等はもう只で笑わないだけの修行をしているなどと思つたのである。そんな事を考えながら、格別今女の子のこわがった物の正体を確かめたいと云う熱心もなく、垣のとぎれた所から、ちよつと横に這入つて見た。

そこには少し引つ込んだ所に、不断は植木鉢うえきばちや箒ほうきでも入れてありそうな、小さい物置があつた。もう物蔭は少し薄暗くなつていて、物置の奥がはつきり見えないのを、覗のぞき込むようにして見ると、髪を長く垂れた、等身大の幽霊の首に白い着物を着せたのが、萱かやか何かを束ねて立てた上に覗かせてあつた。その頃まで寄席よせに出る怪談師が、明りを消してから、客の間を持ち廻つて見せることになつていた、出来合の幽霊である。百物語のアヴァン・グウはこんな物かと、稍馬鹿ややにせられたような気がして、僕は引き返した。

玄関に上がる時に見ると、上がつてすぐ突き当る三畳には、男が二人立つて何か忙がしそうに呷き合つていた。「どうしやがったのだなあ」「それだからおいらが蠟燭は舟で来る人なんぞに持せて来ては行けないと云つたのだ。差当り燭しよくだい台だいに立ててあるのしきやないのだから」と云うような事を言つている。楽屋の方の世話も焼いている人達であろう。

二人は僕の立っているのには構わずに、奥へ這入つてしまふ。入り替つて、一人の男が覗いて見て、黙つて又引つ込んでしまふ。

僕はどうしようかと思つて、暫く立ち竦んでいたが、右の方の唐紙が明いている、その先きに人声があるので、その方へ行つて見た。そこは十四畳ばかりの座敷で、南側は古風に刈り込んだ松の木があつたり、雪見燈籠があつたり、泉水があつたりする庭を見晴している。この座敷にもう二十人以上の客が詰め掛けてゐる。やはり船宿や舟の中と同じ様に、余り話はずんでいない。どの顔を見ても、物を期待してゐるとか、好奇心を持つてゐるとか云うような、緊張した表情をしてゐるものはない。

丁度僕が這入つた時、入口に近い所に、髻の長い、紗の道行触を着た中爺いさんが、「ひどい蚊ですなあ」と云うと、隣の若い男が、「なに藪蚊ですから、明りを附ける頃にはいなくなつてしまいます」と云うその声が耳馴れているので、顔を見れば、薮君であつた。薮君も同時に僕の顔を見附けた。

「やあ。お出なさいましたか。まだ飾磨屋さんを御存じないのでしたね。一寸御紹介をしましう」

こう云つて薮君は先きに立つて、「御免なさい、御免なさい」を繰り返しながら、平手

で人を分けるようにして、入口と反対の側の、格子窓こうしまどのある方へ行く。僕は黙って跡に附いて行つた。

薮君のさして行く格子窓の下の所には、外の客と様子の變つた男がいる。しかも随分込み合つている座敷なのに、その人の周囲は空席になつていたので、僕は入口に立つていた時、もうそれが目に附いたのであつた。年は三十位でもあろうか。色の蒼いあお、長い顔で、髪は刈つてからだいぶ日が立つているらしい。地味な縞しまの、鈍い、薄青い色の勝つた何やらの単物に袴を着けて、少し前まえ屈かがみになつて据わつてゐる。徹夜をした人の目のように、軽い充血あせの痕あとの見える目は、余り周囲の物を見ようともせず、大抵直前すくまえの方向を凝視ねいししてゐる。この男の傍そばには、少し背後うしろへ下がつて、一人の女が付き添つてゐる。これも支度しどが極地味ごくぢみな好みで、その頃流行はやつた紋織お召の単物も、帯も、帯止も、ひたすら目立たないやうにと心掛けてゐるらしく、薄い鼠ねずみが根調ねぢうをなしてゐて、二十はたちになるかならぬ女の裝飾しゆじとしては、殆ど異様に思われる程である。中肉中背で、可哀らしい円顔えんがんをしてゐる。银杏返いちぢやうがえしに結つて、体中で外にない赤い色をしてゐる六分珠ろくぶだまの金釵きんかんを挿さした、たつぷりある髪かみの、鬢びんのおくれ毛けが、俯向うつむいてゐる片頬かたほに掛かっている。好い女ではあるが、どこと云つて鋭い、際立つた線せんもなく、凄すこいような処ところもない。僕は一寸見た時から、

この男の傍にこの女のいるのを、只何となく病人に看護婦が附いているように感じたのである。

薮君が僕をこの男の前に連れて行つて、僕の名を言うと、この男は僕を一寸見て、黙つて丁寧な辞儀をしただけであつた。薮君はそこらにいた誰やらと話をし出したので、僕はひとり縁側の方へ出て、いつの間にか薄い雲の掛かった、暮方の空を見ながら、今見た飾磨屋と云う人の事を考えた。

今紀文いまきぶんだと評判せられて、あらゆる豪遊ごうゆうをすることが、新聞の三面に出るようになってからもうだいぶ久しくなる。きよの百物語の催もよほしなんぞでからが、いかにも思い切つて奇抜な、時代の風尚にも、社会の状態にも頓着とんじやくしない、大胆な所作しよさくだと云わなくてはなるまい。

原もとより来 百物語に人を呼んで、どんな事をするだろうかと云う、僕の好奇心には、そう云う事をする男は、どんな男だろうかと云う好奇心も多少手伝つていたのである。僕は慥たしかに空想で飾磨屋と云う男を画き出していたには違ひないが、そんならどんな風をしている男だと想像していたかと云うと、僕もそれをはつきりとは言ふことが出来ない。しかし不遠慮に言えば、百物語の催主もよほしが氣違染きちぢみた人物であつたなら、どつちかと云えば、必ず躁そ

うきよう 狂うきように近い間違方だろうとだけは思っていた。今実際にみたような沈鬱ちんうつな人物であらうとは、決して思っていなかった。この時よりずっと後になって、僕はゴリキイのフオマ・ゴルジエフを読んだが、若もしきようあのフオマのように、飾磨屋が客を攫つかまえて、隅田川へ投げ込んだって、僕は今見たその風采ふうさいほど意外には思わなかったかも知れない。

飾磨屋は一体どう云う男だろう。錯雑した家族的関係やなんか、新聞に出たこともあり、友達の噂うわさ話ばなしで耳に入ったこともあったが、僕はそんな事に興味を感じないので、格別心に留めずにしまった。しかしこの人が何かの原因から煩悶はんもんした人、若くは今もしている人だと云うことは疑がないらしい。大抵の人は煩悶して焼けになって、豪遊をするとなると、きつと強烈な官能的受用を求めて、それに依って意識をぼかしていようとするものである。そう云う人は躁狂に近い態度にならなくてはならない。飾磨屋はどうもそれとは違うようだ。一体あの沈鬱なような態度は何に根ざしているだろう。あの目の血走っているのも、事によつたら酒と色とに夜を更ふかした為めではなくて、深い物思おもに夜を穩おだやかに眠ることの出来なかつた為めではあるまいか。強しいて推察して見れば、この百物語の催しなんぞも、主人は馬鹿げた事だと云うことを飽くまで知り抜いていて、そこへ寄つて来る客の、或あるいは酒食むさぼを貪むさぼる念に駆られて来たり、或はまた迷信の霧に理性を鎖とぎされていて、こ

わい物見たさの穉^{おさな}い好奇心に動かされて来たりするのを、あの血系の通っている、マリシヨオな、デモニツクなようにも見れば見られる目で、冷^{ひやや}かに見ているのではあるまいか。こんな想像が一時浮んで消えた跡でも、僕は考えれば考えるほど、飾磨屋という男が面白い研究の対象になるように感じた。

僕はこう云う風に、飾磨屋と云う男の事を考えると同時に、どうもこの男に附いている女の事を考えずにはいられなかつた。

飾磨屋の馴染^{なじみ}は太郎だと云うことは、もう全国に知れ渡っている。しかしそれよりも深く人心に銘記せられているのは、太郎が東京で最も美しい芸者だと云う事であつた。尾崎紅葉君が頬杖^{ほおづえ}を衝いた写真を書した時、あれは太郎の真似をしたのだと、みんなが云つたほど、太郎の写真は世間に広まつていたのである。その紅葉君で思い出したが、僕はこの芸者をきよう始て見たのではない。

この時より二年程前かと思う。湖月に宴会があつて行つて見ると、紅葉君はじめ、硯^{けんゆ}友社^{うしや}の人達が、客の中で最多数を占めていた。床の間に梅と水仙の生けてある頃の寒い夜が、もうだいぶ更けていて、紅葉君は火鉢^{ひばち}の傍^{わき}へ、肱^{ひじまくら}枕^{まくら}をして寐^ねてしまった。尤^{もつと}も紅葉君は折々狸寐^{たぬきねいり}入をする人であつたから、本当に寐^ねていたかどうだか知らない。僕は

ふいと床の間の方を見ると、一座は大抵縞物を着ているのに、黒羽二重の紋付と云う異様な出立いでたちをした長田秋濤君が床柱に倚り掛かって、下太りの血色の好い顔をして、自分の前に据わっている若い芸者と話をしていた。その芸者は少し体を屈めて据わって、沈んだ調子の静かな声で、只の娘らしい話振をしていたが、島田に結った髪の毛や、頬のふつくりした顔が、いかにも可哀らしいので、僕が傍の人に名を聞いて見たら、「君まだ太郎を知らないのですか」と、その人がさも驚いたような返事をした。

太郎が芸者らしくないと云う感じは、その時から僕にはあつたのだが、きょう見ればだいぶ変っている。それでもやはり芸者らしくはない。先きの無邪気な、娘らしい処はもうなくなつて、その時つましい中うちにも始終見せていた笑顔が、今はめつたに見られそうにもなくなつている。一体あんなに飽くまで身綺麗にして、巧者に着物を着こなしているのに、なぜ芸者らしく見えないのだろう。そんならあの姿が意気な奥様らしいと云おうか。それも適当ではない。どうも僕にはやはりさつき這入つた時の第一の印象が付き纏まとつていてならない。それはふと見て病人と看護婦のようだと思つた。あの刹那せつなの印象である。

僕がぼんやりして縁側に立っている間に、背後うしろの座敷には燭台が運ばれた。まだ電燈のない時代で、瓦斯ガスも寺島村には引いてなかつたが、わざわざランプを廃やめて蠟燭にしたの

は、今宵こよひの特別な趣向であつたのだろう。

燭台が並んだと思うと、跡から大きな盥たらひが運ばれた。中には鮓すしが盛つてある。道行触みちゆきぶりのおじさんが、「いや、これは御趣向」と云うと、傍にいた若い男が「湯灌ゆかんの盥と云う心持ですな」と注釈を加えた。すぐに跡から小形の手桶ておけに柄杓ひしゃくを投げ入れたのを持つて出た。手桶からは湯気が立つている。先さきつきの若い男が「や、闕伽桶あかおけ」と叫んだ。所謂闕伽桶いわゆるの中には、番茶が麻の囊ふくろに入れて漬つけてあつたのである。

この時玄関で見掛けた、世話人らしい男の一人が、座敷の真ん中に据わつて「一寸皆様みなさんに申し上げます」と冒頭なみを置いて、口上めいた挨拶をした。段々準備が手おくれになつて済まないが、並なみの飯の方を好む人は、もう折詰の支度もしてあるから、別間の方へ来て貰もらいたいと云う事であつた。一同鮓すしを食つて茶を飲んだ。僕には蒔君が半紙に取り分けて、持つて来てくれたので、僕は敷居の上にしやがんで食つた。「お茶も今上げます。盥も手桶も皆新しいのです」と蒔君は言いわけをするように云つて置いて、茶を取りに立つた。しかしそんな言いわけらしい事を聞かなくても、僕は飲食物の入物の形を気にする程、細かく尖とがつた神経を持つてはいないのであつた。

僕が主人夫婦、いや、夫婦にはまだなつていなかつた、いやいや、やはり夫婦と云いた

い、主人夫婦から目を離していたのは、座敷に背を向けて、暮れて行く庭の方を見ながら、物を考えていた間だけであつた。座敷を見ている間は、僕はどうしても二人から目を離すことが出来なかつた。客が皆飲食をしても、二人は動かすにじつとしてゐる。袴の襷を崩さずに、前屈みになつて据わつたまま、主人は誰に話をするでもなく、正面を向いて目を据えている。太郎は傍に引き添つて、退屈らしい顔もせず、何があつても笑いもせずに、おりおり主人の顔を横から覗いて、機嫌を窺うようにしている。

僕は障子のはずしてある柱に背を倚せ掛けて、敷居の上にしやがんで、海苔巻の鮓を頬張りながら、外を見ている振をして、実は絶えず飾磨屋の様子を見ている。一体僕は稟賦ひんぷと習慣との種々な関係から、どこに出ても傍観者になり勝である。西洋にいた時、一頃ひところ大そう心易く付き合つた爺いさんの学者があつた。その人は不治の病を持つていたので、生涯無妻で暮した人である。その位だから舞踏なんぞをしたことはない。或る時舞踏の話が出て、傍そばの一人が僕に舞踏の社交上必要なわけを説明して、是非稽古をしると云うと、今一人が舞踏を未開時代の遺俗だとしての観察から、可笑しいアネクドオト交りに舞踏の弊害を列ならべ立てて攻撃をした。その時爺いさんは黙つて聞いてしまつて、さてこう云つた。「わたくしは御存じの体ですから、舞踏なんぞをしたことはありません。自分の出来ない

舞踏を、人のしているのを見ます度に、なんだかそれをしてる人が人間ではないような、神のような心持がして、只目を睜みはつて視ているばかりでございますよ」と云った。爺いさんのこう云う時、顔には微笑の淡い影が浮んでいたが、それが決して冷刻な嘲あざけりの微笑ではなかった。僕は生れながらの傍観者と云うことに就いて、深く、深く考えてみた。僕には不治の病はない。僕は生まれながらの傍観者である。子供に交つて遊んだ初から大人になつて社交上尊卑種々の集会に出て行くようになった後まで、どんなに感興の湧わき立つた時も、僕はその渦うずまき巻に身を投じて、心しんから楽しんだことがない。僕は人生の活劇の舞台にいたことはあつても、役らしい役をしたことがない。高がスタチストなのである。さて舞台に上らない時は、魚うおが水に住むように、傍観者が傍観者の境さかいに安んじているのだから、僕はその時尤もその所を得ているのである。そう云う心持になつていて、今飾磨屋と云う男を見ているうちに、僕はなんだか他郷で故人に逢うような心持がして来た。傍観者が傍観者を認めたような心持がして来た。

僕は飾磨屋の前生涯を知らない。あの男が少壮にして鉅きよまん万の富を譲り受けた時、どう云う志望を懐いだいていたか、どう云う活動を試みたか、それは僕に語る人がなかった。しかし彼が芸人附つきあい合を盛んにし出して、今紀文と云われるようになってから、もう余程の年と

しつき
月が立つている。察するに飾磨屋は僕のような、生れながらの傍観者ではなかつただろう。それが今は慥かに傍観者になっている。しかしどうしてなったのだろうか。よもや西洋で僕の師友にしていた学者のような、オルガニツクな欠陥が出来たのではあるまい。そうして見れば飾磨屋は、どうかした場合に、どうかした無形の創痕そういを受けてそれが癒えずいにいるために、傍観者になつたのではあるまいか。

若しそうだとすると、その飾磨屋がどうして今宵のような催しをするのだろうか。世間にはもう飾磨屋の破産を云々うんぬんするものもある。豪遊の名を一時に擅ほしいままにしてから、もうだいぶ久くなるのだから、内証は或はそうなっているかも知れない。それでいて、こんな催しをするのは、彼が忽ち富豪の主人になつて、人を凌しのぎ世に傲おごつた前生活の惰力ではあるまいか。その惰力に任せて、彼は依然こんな事をして、丁度創作家が同時に批評家の眼で自分の作品を見る様に、過ぎ去つた栄華のなごりを、現在の傍観者の態度で見ているのではあるまいか。

僕の考は又一転して太郎の上に及んだ。あれは一体どんな女だろう。破産の噂うわさが、殆ど別な世界に栖せいそく息していると云つて好い僕なんぞの耳に這入る位であるから、伶俐れいりらしいあの女がそれに気が附かずにいる筈はずはない。なぜ死期しごの近い病人の体を蝨しらみが離れるように、

あの女は離れないだろう。それに今の飾磨屋の性質はどうだ。傍観者ではないか。傍観者は女の好んで扱えらぶ相手ではない。なぜと云うに、生活だの生活の喜よろこびだのと云うものは、傍観者の傍では求められないからである。そんなら一体どうしたと云うのだろう。僕の頭には、又病人と看護婦と云う印象が浮んで来た。女の生涯に取って、報酬を予期しない看護婦になると云うこと、しかもその看護を自己の生活の唯一の内容としてしていると云うこと程、大なる犠牲は又とあるまい。それも夫婦の義務の鎖つなに繋がれていてする、イブセンの謂いう幽霊たまに崇たられていてすると云うなら、別問題であろう。この場合にそれはない。又恋愛の欲望の鞭むちでむちうたれていてすると云うなら、それも別問題であろう。この場合に果してそれがあろうか、少くも疑を挟はさむ余地がある。そうして見ると、財産でもなく、生活の喜でもなく、義務でもなく、恋愛でもないとして考えて、僕はあの女の捧げる犠牲のいよいよ大きくなるのに驚かすにはいられなかつたのである。

僕はこんな事を考えて、鮓しよを食ってしまった跡に、生しょう姜がのへがしたのが残っている半紙を手を持ったまま、ぼんやりしてやはり二人の方を見ていた。その時一人の世話人らしい男が、飾磨屋の傍へ来て何か呟くと、これまで殆ど人形のように動かずにいた飾磨屋が、つと起たつて奥に這入った。太郎もその跡に引き添つて這入った。

暫くすると菴君が僕のいる所へ来て、縁側にしゃがんで云った。「今あつちの座敷で弁当を上がつていなすつた依田先生が、もう怪談はお預けにして置いて帰ると云われたので、飾磨屋さんは見送りに立ったのです。もう暑くはありませんから、これから障子を立てさせて、狭くても皆さんにここへ集まって貰つて、怪談を始めさせるのだそうです」と云つた。僕はさつき飾磨屋を始めて見たとき、あの沈鬱なような表情に気を付け、それからこの男の瞬またたきもせずに、じつとして据わつてゐるのを、稍久しく見て、始終なんだか人を馬鹿にしてゐるのではないかというような感じを心の底に持つていた。この感じが鋭くなって、一刹那せつなあの目をデモニツクだとさえ思つたのである。そうであるのに、この感じが、今依田さんを送りに立つたと云うだけの事を、菴君の話に聞いて、なんとなく少し和げられた。僕は菴君には、只自分もそろそろ帰ろうかと思つてゐると云うことを告げた。僕は最初に、百物語だと云つて、どんな事をするだろうかと思つた好奇心も、催主の飾磨屋がどんな人物だろうかと思つた好奇心も、今は大抵満足させられてしまつて、この上雇われた話家の口から、古い怪談を聞こうと云う希望は少しも無くなつていたからである。菴君は留めようともしなかつた。

改まつて主人に暇いとま乞ごをしなくてはならないような席でもなし、集まつた客の中には、

外に知人もなかつたのを幸さいわいに、僕は黙もくつて起たつて、舟から出るとき取り換かえられた、齒はの斜へに耗へらされた古下駄こげだを穿きいて、ぶらりとこの怪物ばけもの屋敷やしきを出でた。少し目の慣なれるまで、歩なき艱なんだ夕闇ゆふやみの田圃道てんぼちみちには、道端みちばたの草くさの蔭かげで、微こかに鳴なき出でしていた。

*

*

*

二三日立つてから薮君やぶくんに逢あつたので、「あれからどうしました」と僕が聞きいたら、薮君がここう云いつた。「あなたのお帰かえりになつたのは、丁度ていど好よい引上ひきあり時ときでしたよ。暫しばらくく談はなしを聞きているうちに、飾磨屋かきやさんがいなくなつたので聞きいて見みると、太郎たろうを連つれて二階にがいへ上あがつて、蚊屋かやを吊つらせて寐ねたと云いうじやありませんか。失礼しつれいな事ことをしても構かまわないと云いうような人ひとではないのですが、無頓着むとんじやくなので、そんな事ことをもするのですね」と云いつた。

傍觀者ぼうくわんしやと云いうものは、やはり多少たうしう人を馬鹿ばかにしているに極きまつていはししないかと僕は思おもつた。

青空文庫情報

底本：「山椒大夫・高瀬舟」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年5月30日発行

1985（昭和60）年6月10日41刷改版

1990（平成2）年5月30日53刷

※底本には、表記の変更に関する以下の注記が見られる。

「本書は旧仮名づかいで書かれていたものを（中略）、現代仮名づかいに改めた。」

加えて、極端な宛て字と思われるもの、代名詞、副詞、接続詞などは、以下のように書き換えたとある。

…か知ら↓…かしら 此↓かく 彼此↓かれこれ …切り↓…きり 此↓これ 是↓これ
流石↓さすが 併し↓しかし 切角↓せつかく 其↓その 大ぶ↓だいぶ …丈↓…だ
け 兎角↓とにかく 所で↓ところで 只管↓ひたすら 迄↓まで 儘↓まま 矢張↓や
はり

入力：砂場清隆

校正：松永正敏

2000年8月9日公開

2006年5月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

百物語

森鷗外

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>